



Title	仆而復興
Author(s)	小倉, 正恆
Citation	懷徳. 1931, 9, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88829
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

仆而復興

懷德堂記念會理事長

小 倉 正 恆

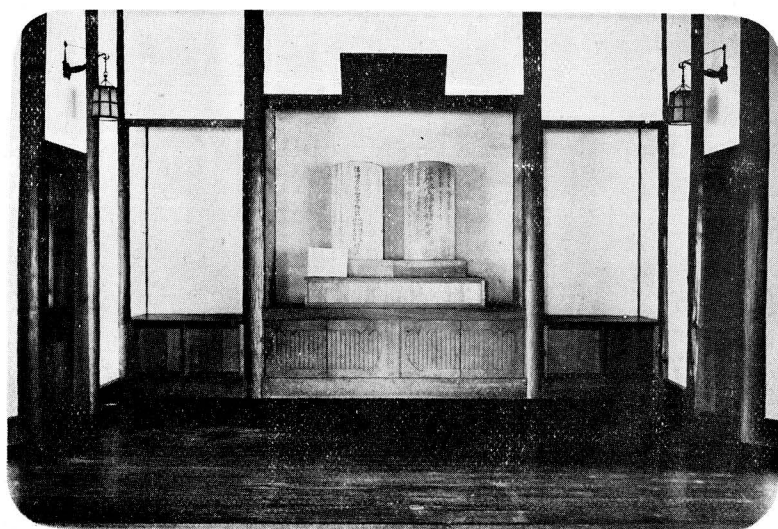
佐藤一齋が中井竹山の門を辭するに方り、竹山は困而後悟仆而復興の八字を書して之に與へ、且その下句が王守仁の語なることを告げた。一齋は此語を誦して深く感ずる所あり、これよりして心を陽明學の研鑽に潜め、遂に彼の大をなしたといふことが傳へられて居る。仆而復興の一語は言ひ易く行ひ難きことであり、而も成功失敗の岐路は實にこの精神の有無如何に係てゐることも申すことが出來やうと思ふ。古來各方面に於て、名を成し功を立てた人々の事蹟に就いて見ても、多く此語の實行者であり、わが大坂が經濟都市として今日の發達を遂げた所以も亦此の精神に依つたものと考へられるのである。仆而復興とは世俗に謂ゆる七倒八起であるが、由來大阪商人は實に此の點に於ては勝れたる力を持つて居る。縱令一敗地に塗るゝことありとも、決して其の勇氣を摧くことなく、奮勵一番直に再興の新計畫に向つて邁進し、決して躊躇逡巡せざる氣概がある。この不屈不撓の精神は經濟都市發達の要訣であるから、將來益々之を振起し之を養成するに力めねばならぬ。而して大阪人士の此特性は、唯單に經濟的方面にのみとゞめず、また之を道德的學術的其他あらゆる方面にも推及せねばならぬ。道德

的方面に就いて考ふるに、單に書を講じ理を説くことは何人にも出来るのであるが、ただそのみにては何の用をもなさぬ。要は實行に在る。儒教に於ても仁に達することが窮極の目的ではあるが、併し其の本は孝悌の家庭道德の實踐に始まる。一部の論語、孔夫子が如何に實行に重きを置いて言行の一致を重要視せられたか、特に例を擧ぐるまでもなく、隨所に發見せらるゝであらう。

わが懷德堂は創建實に二百餘年、一たび倒れて復興り、終始一貫、聖經賢傳によつて大阪文化に貢獻し來つたのであるがその宗旨は實に人格の陶冶に在る。人格の陶冶養成といふも畢竟は言行一致、知行合一の境地に至る努力に外ならぬ。仆而復興とは適竹山先生が一齋に與へたる訓言であるが、先生はこの實行的精神を以て昔の大阪商人に訓へたものと、私は考へたいのである。此の如くして舊懷德堂は大阪町人の學問所として世道人心を裨益し、この商業都市に能く文教を扶殖して偉大なる感化を及ぼし、後の大阪の繁榮に寄與せるところが尠くなかつたものと思ふ。新懷德堂は即ちこの徳性涵養實踐躬行を主眼とする宗旨を繼承して復興せるものであつて、私は深く此點に賛同いたし、再興以來不束ながら本堂事業に關與し、また先年來理事長として敢て微力を盡し、併せて本堂の宗旨を遵守することを念とするのである。しかし孔夫子も學之不講、徳之不修、聞義不能徒、不善不能改、是吾憂也と申して居られる。孔夫子にして然り、況や凡庸の徒に於てをやである。自分は同志諸君とともに、仆而復興の意氣を以て、日新の實を擧げたいと思ふ。



前門堂德懷現



內堂堂德懷現

舊懷德堂▲創學 今を距る二百六年前即ち享保九年五月中井整菴先生が大阪の商人中村睦峯、富永芳

春等五有志と胥謀り諸同志を糾合し尼崎町一丁目(今橋四丁目日本生命保險會社に其の舊址)に講舎を建て懷德堂と名け三宅

石菴先生を聘し學を講せしに徧まる而して同十一年七月幕府の允許を得て更に規模を擴張し大阪學

問所と稱す▲師儒 三宅石菴先生學主となり五井蘭洲先生助教となり日講を主る後石菴の子春樓、

中井整菴其の子竹山、履軒、竹山の子碩果、外孫並河寒泉、履軒の孫桐園先生相踵いで講席を主る

▲廢學 王政維新學制の改革に伴ひ明治二年十二月遂に學校を閉鎖す創學の年より茲に至る實に百

四十六年とす

新懷德堂▲沿革 大正二年六月永田仁助氏等五人懷德堂記念會を設立し講堂を府立大阪博物館西北隅

に建設し五年十月十日開堂式を舉行す六年一月二十七日廣島高等師範學校教授文學博士松山直藏先

生本堂教授となり開講式を舉ぐ昭和二年松山教授逝去のため同四年三月大阪高等學校教授文學士財

津愛象先生教授となる本堂の事業 天聽に達し御内帑金下賜の恩命に浴すること二回に及ぶ

▲規模 總坪數三百六十一坪、講堂百三十四坪餘木造平家建講堂と祠堂とを兼ね、事務所十六坪餘

木造二階建、書庫二十坪鐵筋コンクリート造三階建とす▲事業 本堂の宗旨を達成するため左の事

業を行ふ、一定日講義、二文科講義、三土曜講演、四通俗講演、五素讀科